

## 「満 80 歳になった」

2021 年 04 月 19 日

私は今日、誕生日を迎え、満 80 歳になった。中国の大連市で生まれ、幼児期の 6 年を過ごし、敗戦前と敗戦後の生活の違いを記憶している。父の故郷である大分県杵築市に引き揚げて、小学、中学、高校時代を過ごした。神学校での 6 年と「下谷教会」での伝道師の 4 年、10 年間で東京で暮らした。宮崎県延岡市の「延岡三ツ瀬教会」に 8 年、埼玉県熊谷市の「熊谷教会」に 4 年、牧師として遣わされた。横浜市港南区にある「洋光台港南台伝道所」に赴任し、開拓伝道を担い、名称を「横浜港南台教会」に変え、31 年間、伝道、牧会に当たった。隠退して 7 年になり、横浜に 38 年住んだことになる。

横浜での生活が一番長い、杵築市で過ごした時代のことが強く印象に残っている。それは、洗礼を受け、キリストを信じて生きようと、私の生涯を決定した出来事があったからである。幼い頃は、元気いっぱい少年だったが、青年期に入る頃から、人生に悩み、先が見えなくなった。その時、通っていた寺の住職に、「教会を知っているか」と言われ、初めて教会の門を叩いた。杵築教会の吉新治夫牧師と出会い、聖書を読むことを学び、聖書に関わる諸々の書物を通して、キリスト教の広く、深い世界を知らされた。

キリストを信じ、洗礼を受けた動機は二つあった。一つは、全能の神の下で、「私は私であっていい」、「淀みに浮かぶ、消えては結ぶうたかた」ではなく、今の言葉で言えば、アイデンティティが確保できると確信したことである。もう一つは、自分の醜さに絶望していたが、主イエスの愛を知り、この愛に支えられればと望んだことである。

生きる勇気と希望を得て、この福音を伝える牧師になりたいと、神学校に行った。両親から反対されたので、6 年間、アルバイトをして自活せざるを得なかった。勉強とアルバイトで多忙な生活を送ったが、同じ思いを持つ仲間と楽しく学んだ。教会は、学部の間、鈴木正久牧師の西片町教会、大学院の間、菊池吉弥牧師の下谷教会に通った。二人の牧師から、聖書がいかに力強く、人を立たせるものであるかを学んだ。卒業後、下谷教会の伝道師になったが、神学生時代の過労でうつ病を発症し、苦悩した。その後、赴任した延岡の三ツ瀬教会は身体・精神障がい者が多く、その人々から福音に生きる誠実さを見せられた。障がいを持っていた高校生が礼拝に来ていたが、十数年前、再会した時、彼から「先生は、あの頃、体から絞り出すように説教をしていましたね」と言われた。三ツ瀬教会での 8 年は、私が牧師になる第二の訓練になった時期であった。熊谷教会は幼稚園があり、苦勞した。私は幼児教育ではなく、伝道に集中したいと願っていた。その時に、横浜磯子教会が始めた家庭集会在が、神奈川教区の支援を受け伝道所となり、プレハブの仮会堂であった「洋光台港南台伝道所」に招聘された。開拓伝道を夢見ていたので、赴任した。時と場所を得て、急激に成長した。会堂を献堂し、目標としていた、会員 150 名、礼拝出席 100 名に達したので、私の使命は終わったと、73 歳の 1 ヶ月前に辞任した。教会員と協働しての教会形成は苦勞もあったが、楽しいものであった。惜しまず奉仕してくれた人々を懐かしく思い起こす。しかし、教会に見えても、しばらくして「ここは、私のような者が来る所ではありません」と言って、来なくなった人たちのことが、頭から離れない。生きることに苦悩していた彼女ら、彼らたちこそが、キリストの福音に与るべき人々である。私は「牧師になる」ことを目指して励んできたが、「牧師である」ことは、いかに難しいことであるかを、今さらながら、実感している。隠退後も市民運動に関り、多くの良い仲間がいることは嬉しい限りである。牧師として 47 年も用いられたことに畏れと共に、ただ感謝があるが、80 歳になった今、諸々の心ない言葉と振舞いで人を傷つけたことを悔いる。

私は信仰的、神学的な指導、訓練をしてくださった先生方に恵まれ、感謝である。まず、洗礼に導いてくださった杵築教会の吉新牧師との出会いは、私の生涯を決定的にした。先生は本棚から本を取り出し、信仰に至るように読書指導をしてくださった。今まで全く知らなかったキリスト教の世界に目が開かれた。先生のようになろうと、牧師になる決心をした。神学生時代、鈴木正久牧師と菊池吉弥牧師の説教に魅せられた。お二人の聖書の言葉に肉薄する姿勢と、そこから汲み出すキリストの福音の確かさに圧倒された。ドイツ語を教えてくださいました井上良雄先生の信仰に対する誠実さは神学生たちに尊敬され、諸々の著作を通じて多くを学んだ。神学校では、カール・バルトが最も読まれていたが、教義学を学ぶような読み方であった。ナチスに処刑されたディートリッヒ・ボンヘッフアーの著作から、二人はナチスに抵抗する神学を構築していたことを知り、福音は社会的なことであることを深く学んだ。新約学は荒井献先生、旧約学は木田献一先生に多くを学んだ。木田先生には、ブラジルに宣教師として遣わされた小井沼國光・眞樹子ご夫妻を「支える会」の会長になっていただき、親しく教えを受けた。池明観先生の講演と著作に感動した。岩波の『世界』で、韓国民衆の民主化闘争を世界に発信し続けたT・K生の「韓国からの通信」を愛読し、励まされていた。匿名のT・K生が池先生だったと聞いて驚き、また、納得した。多くの良き先生に出会い、指導、訓練されたことは、本当に幸いであった。

病氣もした。うつ病で数年苦しんだ。ある医者は妻に、「秋吉さんは再起不能だから、離婚した方がよい」と忠告されたが、精神科の医者は「必ず、直る」と言い、妻は、その言葉を信じてくれた。うつ病を経験して、心が落ち込み、不安と恐怖がどのようなものであるかを知っていたので、教会にうつ病の人が多く訪ねて来て、牧会上は有益に働いたと思っている。食道がんが宣告された時、多くの方々をがんで見送っていたので、私の番が来たのかと思った。幸い、内視鏡手術で取り除いてもらった。3年後、胃がんも発見され、これも内視鏡手術で全快した。すると、今度は「悪性リンパ腫」に罹った。これは、抗がん剤でしか治療できない。かなり厳しい治療であった。医者から「後は祈りだけです」と言われ驚いたが、皆さんの祈りによって、乗り越えられた。現在、歩くことに難儀をしているが、日常生活は普通にできるようになった。3つのがんを克服できた訳である。

経済的な貧しさを痛いほど経験した。小さな教会では、教会の必要経費を落とし、残りが牧師謝儀となる。市の税務課に申告に行くと、「これで、生活ができますか」といつも言われた。妻は生活を支えるために、幼稚園、小学校、中学校、高校の教師、大学の講師までした。こんな人はまず、いないのではないかと。働く場があり、社会経験が広がったと言うが、私が牧師になるように、懸命に支えてくれた。

「村の渡しの船頭さんは、今年60のおじいさん」という童謡がある。80は60の20年後であるから、80歳の私は大変なおじいさんである。確かに気力、体力は衰えた。まず、物覚えが悪くなった。活字を読むことが趣味、楽しみで、本や雑誌や新聞などをよく読むが、読んでも、すぐに、その内容を忘れてしまう。そして、言葉がなかなか出てこない。また、テレビに出てくる若い人たちは同じ顔に見え、全く覚えられない。

自分の心を整理するため、また、自分の言いたいことをホームページに書き、雑誌に投書している。牧師の延長線上の市民運動はコロナ禍で、中止、延期が多いが、仲間との関係を保っている。抗がん剤の後遺症か、歩くことが多少不自由なので、草木を愛でながら毎日、公園を4~5千歩くらい散歩している。老人らしく、穏やかに過ごしたいと思っているが、世の中で起こっている出来事を見聞きすると、不安と怒りは収まりそうにない。